

氏名(本籍)	徳丸亞木(福岡県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博乙第1683号		
学位授与年月日	平成13年1月31日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	歴史・人類学研究科		
学位論文題目	「森神信仰」の歴史民俗学的研究		
主査	筑波大学教授	文学博士	大濱徹也
副査	筑波大学教授	博士(文学)	古家信平
副査	筑波大学助教授	博士(文学)	根本誠二
副査	筑波大学教授	文学博士	堀池信夫

論文の内容の要旨

本論文は、日本列島に広く展開している「森」を聖地とみなし、神霊を祭祀する「森神信仰」の具体的信仰形態を山口県下において詳細に検証することで、日本人の心意世界を生活史とかかわらせた民俗誌として詳述せんとした序と3篇12章、結、付論からなる作品である。

序「「森神信仰」研究の課題」は、柳田國男の祖霊信仰論の枠組で検討されてきた研究史を問い質すためにも、「森神」の実態を個別具体的に分析する上での課題を提起している。第一章は「山口県における「森神信仰」研究」の現状を紹介し、現に生きた信仰として地域住民の生活のなかにあることを指摘し、第二章「防長二国の「森神信仰」に関する史料について」で長州藩の手になる各種の調査資料がもつ史料の意味を検討し、「森神」を祀る世界に生きてきた伝承者の生活と心意を追体験する時、はじめて民俗誌を描くことが可能になるとの方法論を提示している。

第一篇「藩政期防長二国における「森神信仰」の諸相」は、長州藩の手になる『寺社由来』『地下上申』『風土注進案』を素材に検討するとし、第一章「藩政期史料にみる「森」と「社」の存在形態」で、社寺台帳、地下図、地誌などに「社」「森」などと記述されていることの意味をさぐり、防長二国における「森神」の祭祀状況を検証し、祭場としての「森」のありかたにつき、長州藩全域にわたり悉皆的に整理・分析をなしたものである。第二章「「森」に祀られる神霊とその祭祀」は、長州藩において「森」を聖地となし、神霊を奉祭する祭祀形態が広く展開しており、「森神」が農耕神として祭祀される傾向が強く、水神祭祀、穀霊祭祀、地霊祭祀、死霊祭祀などの信仰観念とかかわる複合的な性格をおびていたことを解析している。第三章「淫祀解除」と「森」は、長州藩が天保改革で実施した祭場としての「森」を「淫祀」とみなし、耕地などに開発しようとした「淫祀解除」政策をめぐる民心の動向を国学者の眼とかかわらせて考察したものである。

第二篇「山口県下における「森神」祭祀の展開」は、第一篇で把握した山口県内における「森神」の俯瞰図をふまえ、「森祭り(モリマツリ)」と称されている「森神」の個別具体相を調査し、各集落の歴史的環境をふまえて検証した記録である。第一章「谷間部集落の水源地祭祀の「森神」と稲作儀礼としての森祭り」では、豊浦郡豊浦町大河内地区など山陰側の谷間集落を事例となし、谷の水源地祭祀である「森神」が水系に水田を耕作する家の祭祀集団によって構成され、予祝儀礼や播種儀礼、収穫儀礼的性格をもつ農耕儀礼が営まれがちであること、その儀礼に水神祭祀、穀霊祭祀、地霊祭祀などの信仰観念の複合をみいだせることを指摘している。第二章「島嶼

部畑作農村の「森神」祭祀と畑作儀礼は、下関市六連島で畑作農耕神として祀られる「森神」祭礼の紹介をとおし、7月の祭礼が麦の収穫儀礼の性格をおびており、祭礼の中心となる家が祭場の土地所有関係に規定され、祭場と耕作地の位置関係を基準に祭祀集団が形成されていることに、地霊祭祀の観念を読みとろうとしている。第三章「「森神」と死霊・地霊祭祀」は、大津郡向津具村における屋敷神として祭祀されている「モリサマ」を素材に、「森神信仰」として表出される地霊祭祀観念と死霊祭祀観念の複合形態がもつ諸相を具体的に検討し、屋敷神として祭祀される「森神」に屋敷地あるいは耕作地の地霊の性格が強められ、特定の家筋に結びつくよりも土地所有関係の変動で祭家も変わることを、落人や事故死者、動物霊など死霊祭祀の伝承をあわせもつことがみられるように、基層に地霊観念のあることを指摘している。第四章「「森神」と動物霊の祭祀」では、牛馬守護神ともなる「森神」にまつわる動物霊祭祀の観念を考察している。第五章「「森神信仰」にみる〈稲作類型〉と〈畑作類型〉」は数年に一度の周期的祭礼である「年祭」をともなう「森神」のありかたを、〈稲作類型〉と〈畑作類型〉という生業文化複合論の枠組をふまえて検討するなかで、開拓始祖祭祀伝承と地霊祭祀観念がはたした意味を問わんとしている。山口県下では、「年祭」をともなう「森神」の多くが谷間水源に祀られる水源祭祀の「森神」であり、その儀礼には〈稲作類型〉と〈畑作類型〉の複合がみられること、その由来伝承には動物霊など死霊祭祀の観念がみられ、開墾した土地の地霊を周期的に迎え祀ることで慰撫し、守護神として再生させる観念が併存していること、さらに開拓始祖祭祀の伝承が結びついている可能性も指摘している。いわば第二篇は、個別具体的な事例研究をふまえて現代の「森神信仰」の基層に水神祭祀、穀霊祭祀、地霊祭祀、死霊祭祀といわれる信仰観念の複合が認められることを検討し、藩政期から現代まで連続性をもって「森神信仰」が息づいていたことを明らかにしようとしたものである。そこでは祖霊信仰がこうした「森神信仰」の基幹にかかわる信仰観念の一部をなすものでしかなく、「森神」は、信仰観念の多様な複合をふまえ、はじめて祖霊の「祭地」として位置づけられるものであることを論じようとしている。

第三篇「「森神」にまつわる伝承の動態」は、「森神」伝承を地域住民がいただける「郷土」への思いを信仰的世界観として表白したものと把握し、「森神」をめぐる記憶を伝承者の家をめぐる生活史としての民俗誌を叙述するなかに問い、「森神」や屋敷神にまつわる伝承が再構成されていく過程を検証しようとしたものである。第一章「「森神」と洪水伝承」は、大津郡日置平野掛淵川沿いの「森神」をめぐる記憶としてかたられる洪水伝承を、地域の歴史的、地理的、生態的環境をふまえて問い質し、「森神」をめぐる心意的世界に宿る死霊妻子伝承をささえた動機と関連付けて分析し、「森神」にまつわる由来伝承が地形・水利などの地理的環境、地域固有の生業形態などに強く規定されており、その大地の歴史ともいべき歴史伝説の相貌をおびてかたられてきたことを指摘している。第二章「「森神」にまつわる死霊祭祀伝承の位相」は、豊浦郡大河内地区における「異人」の死霊を同族で祭祀する「森神」につき、その死霊祭祀伝承を検討したものである。祖霊とは異質の「異人」の死霊が同族神として祭祀される背後には、地域を読み解く歴史の言説、とくに戦乱にまつわる物語が忠実としてとりこまれて「森神」伝承に付加されていくことが説かれている。第三章「「森神」と地神盲僧」は、この「森神」をめぐる死霊祭祀伝承の形勢に藩政時代から深くかかわってきた地神盲僧が「森」の観念を意味づけ権威づけていった軌跡をあつづけたものである。第四章「死霊祭祀伝承の再構成過程と日蓮宗系宗教者」は、死霊祭祀伝承がもつ心意世界を読み解く上で大きな役割をはたした、地神盲僧や日蓮宗系宗教者の役割を検討しようとしたものである。地域がまきこまれた戦乱や屋敷地をめぐる事件が「森神」にまつわる記憶となり、地神盲僧や日蓮宗系宗教者の手で「物語」として再構成されていく過程を、主に日蓮宗系宗教者の足跡を具体的にたどることであつづけている。

「結」は、3篇にわたって論述しようとした山口県下における森神信仰の存在形態の総括をふまえ、「森神信仰」が形骸化した遺習ではなく、家筋と屋敷筋という二つの要素が、「森神」をめぐる地域の小宇宙的な世界観のなかに融合され、家の永続をはかる物語として現にかたりつがれ、民族の倫理として現代も民衆生活をささえていることを指摘している。

付論「豊浦郡豊浦町川棚台「楠の森」をめぐる出来事から」は、楠田家をめぐると一霊能者大賀かほるの軌跡を

たどるなかに、「森神」を中心に紡がれた人々の心意世界を描くことで、生活を場とする民俗誌叙述への一試論で、現在に生きる「森神」進行の様態を示唆せんとしたものである。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、山口県下における「森神信仰」の多様な相貌につき、長州藩が編纂した『寺社由来』『地下上申』『風土注進案』をもとに、悉皆的に所在形態を把握した上で、「森神祭祀」の実態を日本海側の谷間集落、島嶼、半島において20年にわたり調査した成果を個別具体的に検証し、柳田國男が提起した「祖霊信仰論」の枠組に規定されてきた研究史を問い質し、複合的な信仰観念の所産として「森神」信仰を把握し、「森」に規定された地域の心意世界にかかわらせて「森神」信仰の具体相を解析しようとした意欲的作品である。

その第1は、「森神」祭祀をめぐる個別具体的な事象を、20年にわたる地域調査をふまえ、精密画のごとく丹念に生活に根ざした民俗誌として描いた事例研究であること。

第2は、「森神信仰」が地域をめぐる歴史的、地理的、生態的環境に強く規定されたもので、水神・穀霊・地霊・死霊をめぐる多様な信仰観念が複合したものとして表出されている実態を提示したこと。

第3は、「森」をめぐる地域の記憶が「森神」と家をめぐる物語としてかたられ、時代のなかで新しく再構成されていくことで、現在も地域住民の心意世界を色どり、生活の場に息づいていることを検証したこと。

本論文は、日本列島に広く展開している「森神信仰」実態を山口県下で個別具体的に検討することで日本人の神観念をささえる心意世界の一端を解き明かそうとしたものとして、今後の研究の礎石となるものであるが、若干の問題も残されている。第1は、「森神信仰」がもつ多様な相貌をあとづけることにおわれ、信仰が時代に負わされた影を歴史的に読み解く眼がやや弱いこと。第2は、「森神」をめぐる多様な個別調査がもたらした情報量が左右されたがため、論述にやや精粗がみられること。

本論文は、これらの課題が残されているものの、山口県下に展開している「森神信仰」の具体像を個別に解析し、「森」をめぐる心意世界を地域住民の生活をふまえて検討した作品として、学界に大きな地歩を占めるものと認められる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。